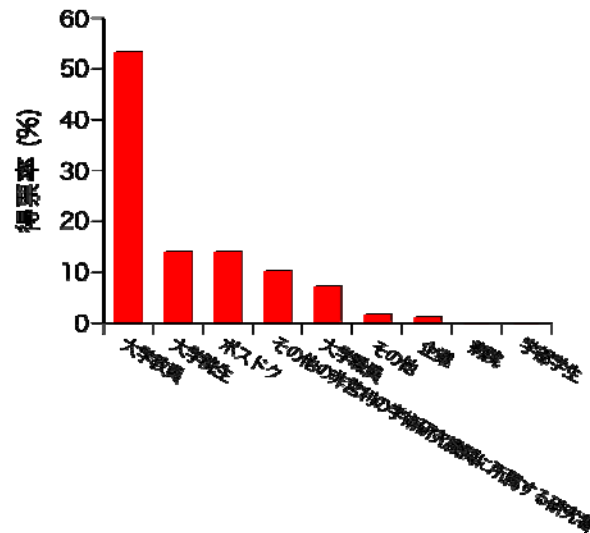


包括脳ネットワークに関するアンケート

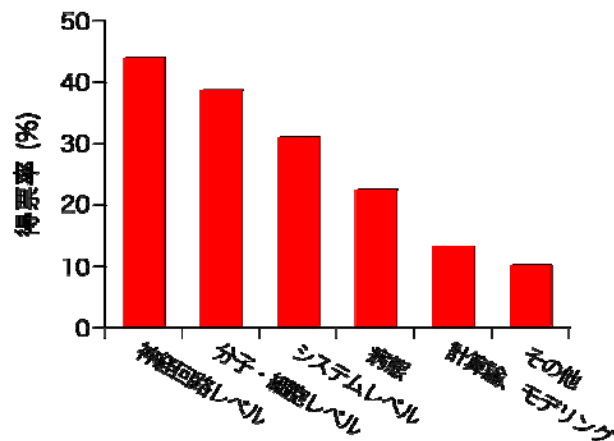
質問 1: あなたの所属をお教えてください。



質問 2: 質問 1 でその他とお答えいただいた方は、所属の種類をお答え下さい。

独立行政法人、独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター、科学技術振興機構、国立共同利用機関法人；大学共同利用機関、PI、国立大学研究所教授、脳科学研究戦略推進プログラム、助教、助教、「私は、助教 (PI 手前) です。」、博士後期課程。

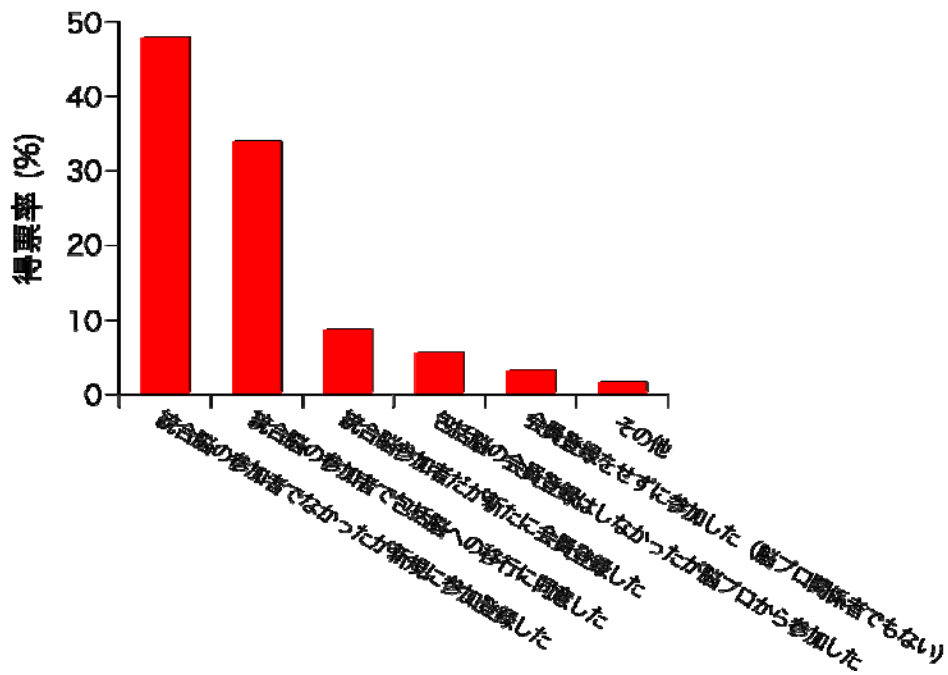
質問 3: あなたは現在脳研究のどの分野に関わっていますか(複数回答可)。



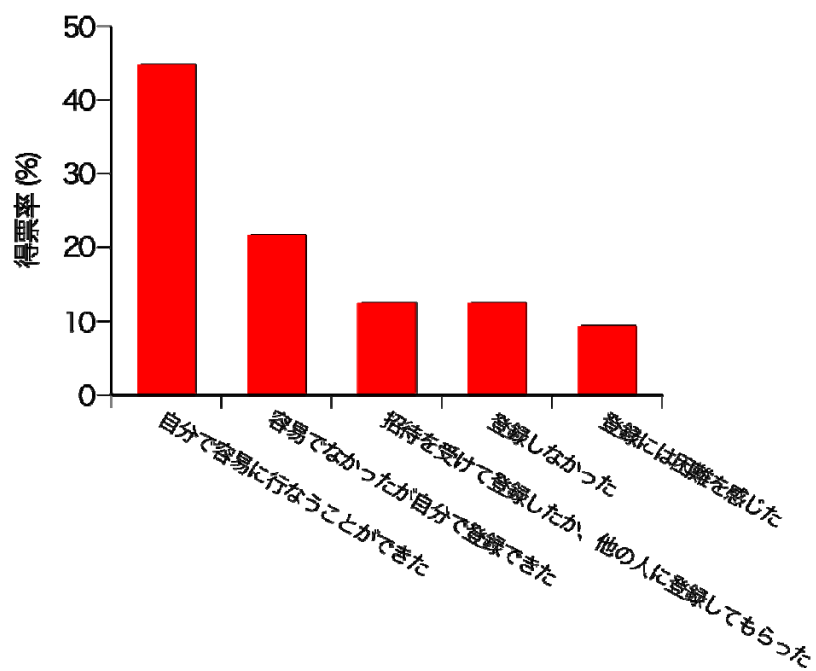
質問 4: 質問 3 でその他とお答えいただいた方は、分野をお答え下さい。

認知科学、心理学、認知行動レベル、精神・行動障害の方の教育支援、脳MRI 画像、心理学、治療法開発、脳機能イメージング (fMRI)、行動神経科学、運動学習、ブレインマシンインターフェース、cytology 分野での新しい方法論研究開発 (マイクロファブリケーション、高エネルギー長短パルスレーザーの cytology 応用 (同レーザーを用いた神経回路のプラットフォーム上での任意構築、神経回路形成の時空間制御、同レーザーと細胞との相互作用研究)、細胞の非染色 living cell 動態解析 (intrinsic fluorescence やナノ構造体散乱スペクトル解析による細胞内オルガネラの解析))。

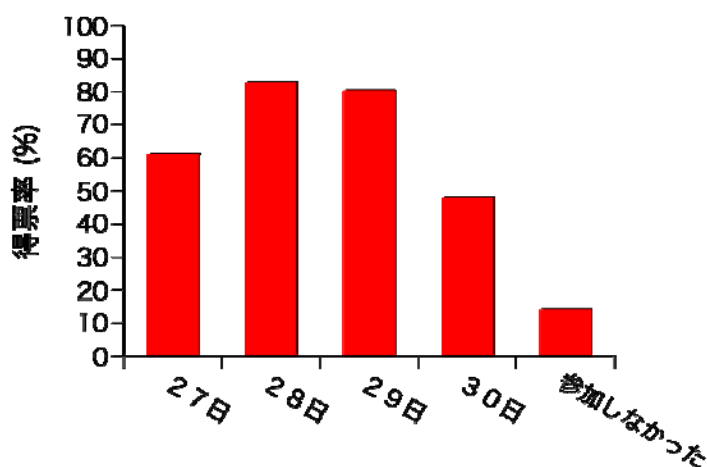
質問5: 包括脳ネットワークへの会員登録についてお答え下さい。



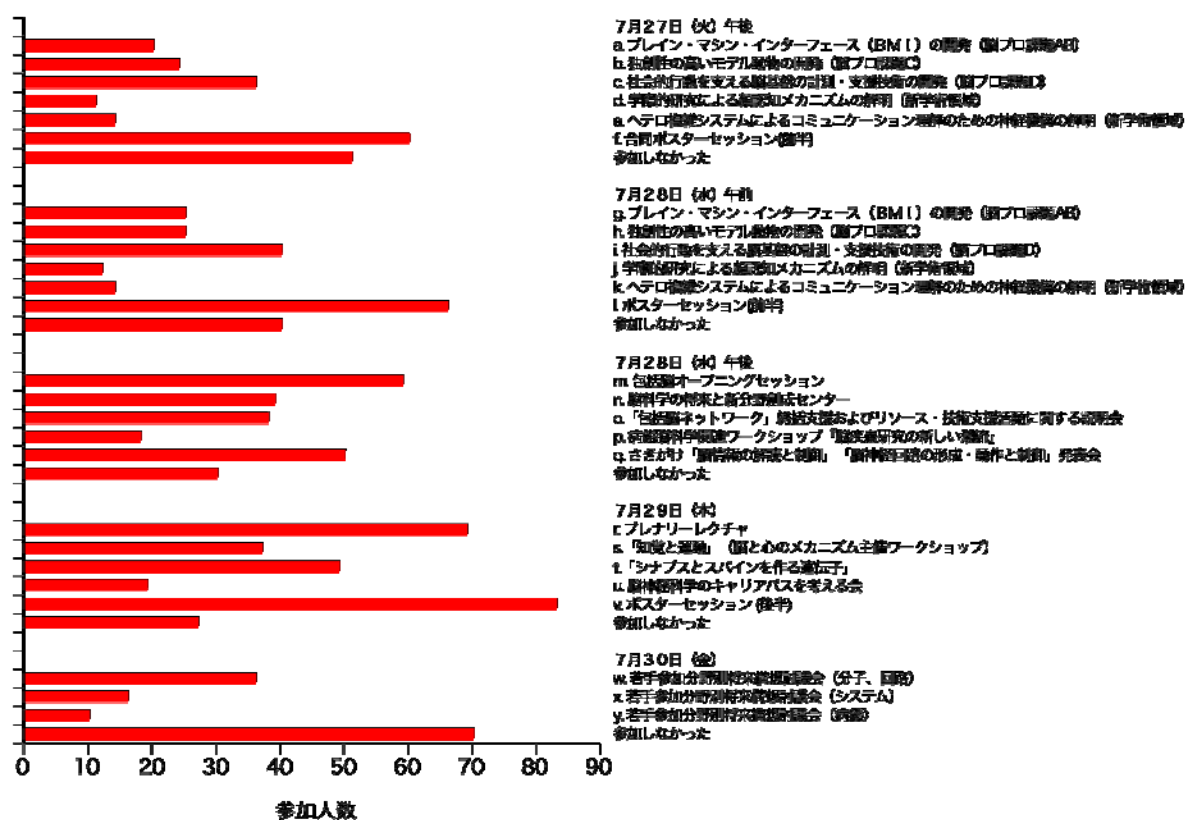
質問6: ワークショップの参加登録は容易に行えましたか？



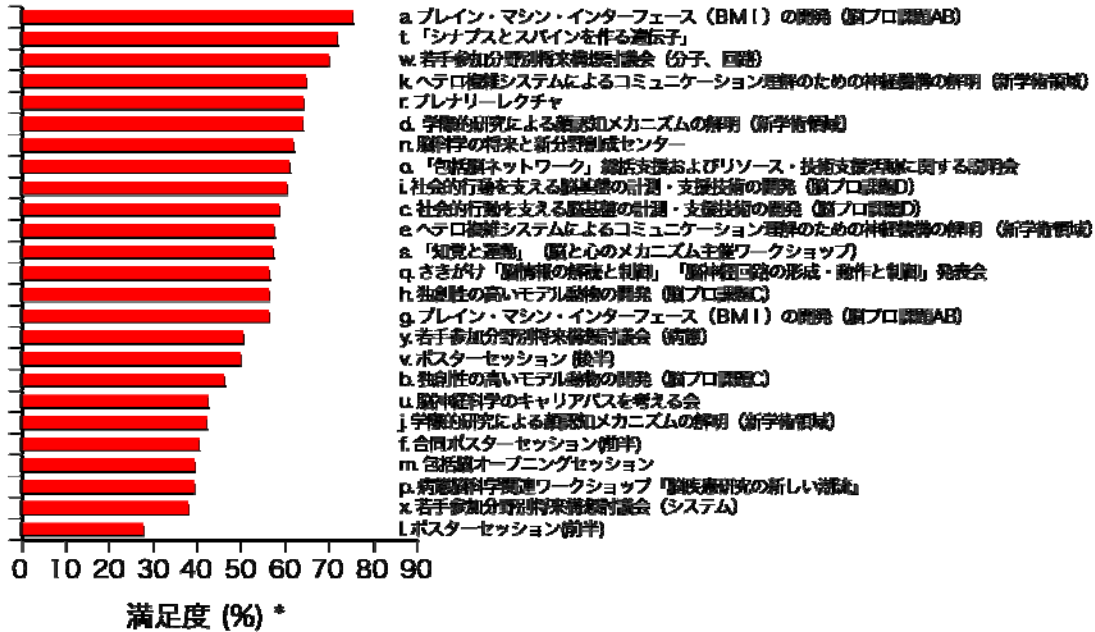
質問 7: 実際に参加した日程をお教えてください(複数回答可)。



質問 8~12: どのイベントに実際に参加しましたか(複数回答可; 7月27日(火)午後~7月30日(金))。



質問 13: 有意義と思われたイベントはどれでしたか。質問 8～質問 12 の選択肢のアルファベットでお答え下さい(複数回答可)。



質問 14: 質問 13 で有意義と思われたものの理由を a-y の記号を記した上で簡単をお願いします。

a. ブレイン・マシン・インターフェース(BMI)の開発(脳プロ課題AB)

- ・ 研究に直結するから。
- ・ 自分が現在取り組んでいる研究手法をテーマとしていたため。
- ・ 生体信号取得のための電極や解析手法についての新たな知見を得た。
- ・ 直接関わっている分野以外の話が聞けて有意義であった。

b. 独創性の高いモデル動物の開発(脳プロ課題C)

- ・ 遺伝子改変マウスを用いた研究の現状が聞けたこと。
- ・ 自分の研究分野以外の技術を知ることができた。
- ・ 周辺領域の話だったから。
- ・ 普段自分が携わっていない分野で、かつ日本神経科学大会やSfNなどの大きな学会ではほかの分野まで網羅できないので、よい勉強になった。

c. 社会的行動を支える脳基盤の計測・支援技術の開発(脳プロ課題D)

- ・ 学術的に非常にレベルが高く、興味をもてるものであった。
- ・ 最先端の内容が発表された。
- ・ 自己が参加していない大型研究費による研究目標や活動内容を把握できた。
- ・ 自身が知りたかった、最新の研究内容についての情報が得られたから。
- ・ 自分の研究分野以外の技術を知ることができた。
- ・ 直接関わっている分野以外の話が聞けて有意義であった。
- ・ 脳神経科学領域における基礎から応用まで幅広い内容の発表があり、勉強になった。

d. 学際的研究による顔認知メカニズムの解明(新学術領域)

- ・ 以前から注目していたので。
- ・ 口頭発表がおもしろかった。

- ・自分の領域なので。

e. ヘテロ複雑システムによるコミュニケーション理解のための神経機構の解明(新学術領域)

- ・共に今の脳科学の進展具合や、状況がわかりやすく把握できた点。
- ・第一線で活躍されている研究者の方々の最新の研究成果を聴かせて頂けて大変勉強になりました。
- ・脳の解剖学的見解、機能的な側面、心理学的実験、数学による計算論、異なる分野が集結しており、まさに参加した研究者がヘテロ複雑系コミュニケーションを行える環境があった。

f. 合同ポスターセッション(前半)

- ・ポスター説明を介した交流をもてたため。
- ・異なる研究分野の勉強ができる有意義な場だった。
- ・共に今の脳科学の進展具合や、状況がわかりやすく把握できた点。
- ・具体的に研究者と交流できた。
- ・自身の研究内容を発表できたから。他の研究者と、密な議論が行えたから。
- ・第一線で活躍されている研究者の方々の最新の研究成果を聴かせて頂けて大変勉強になりました。
- ・直接関わっている分野以外の話が聞けて有意義であった。

g. ブレイン・マシン・インターフェース(BMI)の開発(脳プロ課題A)

- ・システム分野における現在の研究手法を理解できた。
- ・データ共有の話題は有意義だった。
- ・バイオリギング研究、データベースなど他分野の研究者の話が聞けて楽しかったです。
- ・最新の興味深い研究内容と方向性を知ることができた。
- ・生体信号取得のための電極や解析手法についての新たな知見を得た。

h. 独創性の高いモデル動物の開発(脳プロ課題C)

- ・ウイルスベクターを扱った研究をしているため、有用な情報が多く手に入った。
- ・逆行性ウイルスベクターを用いた研究の現状が聞けたこと。
- ・普段自分が携っていない分野で、かつ日本神経科学大会やSfNなどの大きな学会ではほかの分野まで網羅できないので、よい勉強になった。

i. 社会的行動を支える脳基盤の計測・支援技術の開発(脳プロ課題D)

- ・学術的に非常にレベルが高く、興味ももてるものであった。
- ・最新の興味深い研究内容と方向性を知ることができた。
- ・最先端の内容が発表された。
- ・自己が参加していない大型研究費による研究目標や活動内容を把握できた。
- ・他の領域の会議に出られなかったが、ポスターで内容を確認することができた。
- ・直に質問、議論ができる。
- ・同様の画像研究をしているグループが包括脳にもいることがわかった。
- ・脳神経科学領域における基礎から応用まで幅広い内容の発表があり、勉強になった。
- ・幅広い分野を通して社会的行動に関わる研究をテーマとしていたため。

j. 学際的研究による顔認知メカニズムの解明(新学術領域)

- ・口頭発表がおもしろかった。
- ・自分の所属する班で興味深かった。

k. ヘテロ複雑システムによるコミュニケーション理解のための神経機構の解明(新学術領域)

- ・じっくりと研究の議論をできる環境であるとともに、研究者同士の目指している方向性に統一感があった。
- ・第一線で活躍されている研究者の方々の最新の研究成果を聴かせて頂けて大変勉強になりました。

l. ポスターセッション(前半)

- ・ポスター説明を介した交流をもてたため。
- ・研究当事者と議論を十分にできたから。
- ・自身の研究内容を発表できたから。他の研究者と、密な議論が行えたから。
- ・自身の属する研究グループの成果を多くの人に知ってもらい、有意義なディスカッションをすることができた。また、最近の様々な興味深い研究発表を知ることができた。

m. 包括脳オープニングセッション

- ・アクションを起こすべきという具体的な動機が生まれた。
- ・研究を取り巻く環境について考えさせられた。
- ・包括脳の全貌と、今後の研究(研究費)についての展望が得られた。

n. 脳科学の将来と新分野創成センター

- ・ アクションを起こすべきという具体的な動機が生まれた。
- ・ 研究を取り巻く環境について考えさせられた。
- ・ 研究予算の現状がよく分かった。
- ・ 今後の脳科学の発展に不可欠な予算を拡充獲得していくための研究戦略が重要と思えた。
- ・ 神経科学をとりまく科学的な部分以外の状況がよくわかった。
- ・ 大学院生では普段知る機会の少ない予算の話など、将来参考になると思った。
- ・ 脳科学の将来について集まってオープンに議論するような場所は、ほとんどなかったもので、画期的。今後も、このような企画を行っていくべきだと思います。
- ・ 脳科学の将来や研究者としての処し方を考えるのに有意義ではあったが、この手の話は2-3年に一回で十分だろう。
- ・ 脳科学の全体的な流れが理解できた。
- ・ 脳科学の予算の現状が分ってよかった。
- ・ 脳科学研究の助成に対する日本の他分野の研究者集団の率直な意見がよくわかった。
- ・ 脳研究に対する支援の状況と他分野からの反発の様子がよくわかった。
- ・ 脳研究の現状が理解できた。

o. 「包括脳ネットワーク」総括支援およびリソース・技術支援活動に関する説明会

- ・ どのような支援が行われるかがよく理解できた。
- ・ ひとつのラボでできる技術には限界があるので、このような枠組みは研究の推進に重要であると思います。
- ・ 活用できるリソースや技術の現状が理解できた。
- ・ 技術支援活動についての詳細を知ることができた。
- ・ 研究を取り巻く環境について考えさせられた。
- ・ 包括脳活動について了解できた。

p. 病態脳科学関連ワークショップ『脳疾患研究の新しい潮流』

- ・ 研究の参考になった。
- ・ 自分の研究に関連する分野であった。
- ・ 病態分野の研究進歩はとて勉強になった。

q. さきがけ「脳情報の解読と制御」「脳神経回路の形成・動作と制御」発表会

- ・ さきがけでの研究内容を知ることができた。
- ・ さきがけで実際に研究を行っている研究者の発表を生で聞くことができたことは今後のために有用だった。
- ・ 研究内容に興味があった。
- ・ 最新の興味深い研究内容と方向性を知ることができた。
- ・ 自らの研究分野であり、先生方の講演が非常に面白かったため。
- ・ 若手・中堅研究者の話から、将来の自分の研究について考えるきっかけを得られたから。
- ・ 生体信号の数理的な解析手法についての講演が興味深かった。
- ・ 第一線で活躍されている研究者の方々の最新の研究成果を聴かせて頂けて大変勉強になりました。
- ・ 脳科学の最先端で研究する科学者の話が聴けた。
- ・ 評価の高い若手研究者の研究内容と質が分かったため。

r. プレナリーレクチャ

- ・ さすが、分子と回路と行動をつなぐ研究はこうあれという迫力ある講義。
- ・ アカデミックな企画については全体のフォーカスが定まらないように感じたが、その中では目的が明確な企画だったと思う。
- ・ 学術的に非常にレベルが高く、興味をもてるものであった。
- ・ 興味深い研究発表であった。
- ・ 研究内容に興味があった。
- ・ 講演は分かりやすく、内容も良かった。
- ・ 最近の研究の進歩に驚いた。
- ・ 大変刺激を受けた講演であった。
- ・ 知識の整理に役立った。
- ・ 中西先生のお仕事の全体がよく理解できた。
- ・ 日本のトップ研究者の話をじっくり聞けたため。
- ・ 非常に判り易かつユーモアに富んだ優れたレクチャーであった。
- ・ 著名な研究者の洗練された話が聞けたから。
- ・ 中西先生の研究姿勢や活動内容を共有できたこと。

s. 「知覚と運動」(脳と心のメカニズム主催ワークショップ)

- ・ アカデミックな企画については全体のフォーカスが定まらないように感じたが、その中では目的が明確な企画だったと思う
- ・ ハエ、サカナからヒトまで、幅広いトピック。もう少し相互の連関や議論があるとなお良かった。
- ・ 英語での発表を聴くよい機会となった。発表内容も充実していた。
- ・ 科学的興味を引く内容であった。
- ・ 口頭発表がおもしろかった。
- ・ 自らの研究分野であり、先生方の講演が非常に面白かったため。
- ・ 第一線で活躍されている研究者の方々の最新の研究成果を聴かせて頂けて大変勉強になりました。
- ・ 特に午前中の分子回路の発表はレベルが高かった。
- ・ 著名な研究者の洗練された話が聞けたから。

t. 「シナプスとスパインを作る遺伝子」

- ・ これまでにない若手研究者とシニアの研究者との交流が図れたこと。
- ・ ざっくばらんな議論で良かったです。とくに、tは普段は聞けないような質問があつて非常に良かったです。
- ・ キャリアの変遷を知ることが出来た。
- ・ シナプスやスパインに関する最新の知見と若手研究者に向けた話題が語られ参考になった。
- ・ 一流研究者の足跡を知ることができた。
- ・ 各研究者の苦労話が聞けて、励みになった。
- ・ 確立された研究者がどのように自分の研究を進めてきたのかが分かって面白かった。
- ・ 研究 (の取り組み方) に対する新しい視点を与えた。
- ・ 研究の方向性についてかんがえさせられた。
- ・ 現在先端的な研究を行われている若手PIの先生方が、どのようないきさつで現在の研究テーマに取り組むようになったかがわかり、大変参考になった。
- ・ 若手のスター科学者による裏話が面白く、勇気を与えてくれるものであった。
- ・ 若手向けのメッセージ
- ・ 他の研究者の研究に対する姿勢などが参考になった。
- ・ 通常の学術講演では決して聞くことのできない苦労や裏話が聞けてよかった。
- ・ 通常の班会議や学会ではほとんどみることのない研究の背景の苦労話などを聞くことができて大変有意義でした。
- ・ 脳科学の将来や研究者としての処し方を考えるのに有意義ではあったが、この手の話も2-3年に一回で十分だろう。
- ・ 発表者の今に至る過程の中での実際の思考、行動が、今後の研究活動に大いに参考になった。
- ・ 普段聞けない分野の話が聞けた。
- ・ 普通のシンポジウムとは違った趣向でよかった。

u. 脳神経科学のキャリアパスを考える会

- ・ ワールドカフェ形式で、若手研究者とフランクに脳神経科学の今後についてディスカッションをすることができた。
- ・ 活発な議論が行われ非常に有意義だった。
- ・ 議論の方法がたいへんユニークで面白かった。
- ・ 通常聞けない話も聞けた。

v. ポスターセッション (後半)

- ・ より広い分野の研究発表をみられた。
- ・ ディスカッションが為になった。
- ・ ポスター説明を介した交流をもてたため。
- ・ 具体的に研究者と交流できた。
- ・ 研究当事者と議論を十分にできたから。
- ・ 自身の研究内容を発表できたから。他の研究者と、密な議論が行えたから。
- ・ 自身の属する研究グループの成果を多くの人に知ってもらい、有意義なディスカッションをすることができた。また、最近の様々な興味深い研究発表を知ることができた。
- ・ 自分が発表した (発表そのものはまずまずの出来)。
- ・ 若手の研究者を encourage する良い企画だと思った。
- ・ 第一線で活躍されている研究者の方々の最新の研究成果を聴かせて頂けて大変勉強になりました。
- ・ 知り合い研究者との意見交換ができた。
- ・ 直に質問、議論ができる。
- ・ 直接関わっている分野以外の話が聞けて有意義であった。

w. 若手参加分野別将来構想討議会(分子、回路)

- ・ これまでにない若手研究者とシニアの研究者との交流が図れたこと。

- ・さまざまな問題点を、世代を超えた神経科学者と討議できたので参考になった。
- ・ざっくりばらんな討論で良かったです。
- ・それぞれの人の研究スタイルに関するポリシーの様なものが知ることができた。
- ・学会ではやれないような討論ができたこと。
- ・現在の問題点・今後の課題など忌憚のない意見が聞けたため。
- ・若手、PIともに自由な意見を発現することができてよかったとおもう。特に若手のポストドク意見を今回聞くことができて非常に有意義であった。
- ・若手からの活発な意見発表があった。
- ・大御所と呼ばれる先生方と若手の先生方の討論が非常に面白く、随所に為になる教訓が含まれていて、大変良かった。
- ・通常の学術講演で決して聞くことのできない苦労や裏話が聞けてよかった。
- ・通常の班会議や学会ではほとんどみることのない研究の背景の苦労話などを聞くことができて大変有意義でした。
- ・普段自分が携わっていない分野で、かつ日本神経科学大会やSfNなどの大きな学会ではおまかの分野まで網羅できないので、よい勉強になった。
- ・普段聞けない話が聞けた。
- ・様々なレベルの研究者の研究に対する考え方が分かって面白かった。
- ・立場の異なるパネラーの生の意見が聞けたこと。

x. 若手参加分野別将来構想討議会(システム)

- ・さまざまな若手研究者の声がかけて良かった。
- ・システム脳研究の第一線で研究している先生方の、将来への研究構想や、研究に対する考え方を直接知る、貴重な機会だった。
- ・先生方の紹介といった感じでしたが、どのようなことをされているかがわかり有意義でした。
- ・普段なかなか聞けない研究裏話が聞けた。
- ・霊長類脳機能の生理学的解析の研究発表は、分野外人間には難しいのだが、この討議会では学生向けのイントロが説明された事、また何が問題であるか、などが丁寧に説明されていた。ほかの様々な分野に関しても、同様の討議会(またはセッション)が開かれる事で、この包括脳ワークショップで求められていた「異分野交流」が実現され易くなる、と感じた。

y. 若手参加分野別将来構想討議会(病態)

- ・研究のストラテジーについて参考になった。
- ・自分の研究に関連する分野であった。

その他

- ・この分野の新参者のため、すべての分野でその動向を把握することができ意義があった。特にnは今後研究に参入する上で参考になった。
- ・これまでの経緯や現状について、多くの人にあまり知られていないことも話され、今後の脳科学研究を推進していく上での問題点を考えるよいきっかけになったと思う。
- ・これまでの研究に関して、着眼点、裏話、どう発展させて来たかなど、研究半生を振り返るようなお話で、とても面白かったです。大学院生やポストドク、さらに若手の大学教員にも非常にためになる企画でした。
- ・どれも今後の研究に対して大変参考になった。
- ・ポスター発表は例え自分の専門でなくても相互コミュニケーションがとれ、情報収集が可能であったから。その他のイベントで有意義だったのは、その分野での最新情報を簡単に知ることができたから。
- ・メンバーでないために普段聞くことのできない脳プロやさきかけの研究発表を聞く機会があり、有意義でした。
- ・興味のある分野だった。
- ・経験豊かな研究者の研究のコツを披露してもらえる機会は若手にとって掛替が無いから。
- ・今後の脳科学研究にはヒトを用いた研究が不可欠であり、それらのリソースを日本人の検体で誰でも容易に研究できるという点があり、意義であると考えられたから。
- ・最近の成果発表があったため。
- ・自分が携わっている研究分野だから。
- ・自分が出たから。
- ・自分が日頃抱く悩みに対して、研究・アイデア面で示唆的であった。
- ・自分の研究内容に近い発表が多かったため。
- ・実験と計測に関わる先端技術を詳しく見る事ができた。
- ・将来の神経科学の振興のために必要と考えます。
- ・全体として若手研究者の参加が多かったことは心強かった。質疑の質が高かったと思う。
- ・大変勉強になった。
- ・脳プロ課題Cで開発されているVirus Infectionテクニック、独創性の高いモデル動物がとても魅力的で、共同研究が可能になった際には、ぜひ利用させていただきたいと感じた。いづろ、使えるようになるのか?どのように実際に使っているのか?についての

- ・脳科学に携わる人たちの今後の方向性や流れを知ることができた。また、リソースを有意義に活用する方法等も知ることができた。
- ・包括脳とこの集会の意味づけが明確になった。

質問 15: 参加したイベントに対する要望や意見がありましたら、イベント名を a-z で指定した上で記入をお願いします。

d. 学際的研究による顔認知メカニズムの解明(新学術領域)

- ・バラエティに富んでいて勉強になりました。

f. 合同ポスターセッション(前半)

- ・ポスター会場が狭く見にくかったので、もう少し余裕を持った会場あるいはレイアウトにしていただければと思います。

i. 社会的行動を支える脳基盤の計測・支援技術の開発(脳プロ課題D)

- ・ポスター会場が狭く見にくかったので、もう少し余裕を持った会場あるいはレイアウトにしていただければと思います。

l. ポスターセッション(前半)

- ・コアタイムが 21 時までなのに、21 時までに撤収が指示されている。当然のことだけど 21 時までいる人は少ない。他のシンポジウムの空いた時間を、むりやりコアタイムに設定していて、運営のデザインがされていない。

m. 包括脳オープニングセッション

- ・包括脳全体のイメージがわかった。

n. 脳科学の将来と新分野創成センター

- ・それぞれ、非常に有意義であったが、議論の時間が足りないと感じました。SNS などと連動して、事後も議論を継続できるようにすると良いと思います。
- ・時間の都合でわずかな意見しか聞けなかったのが残念であった。せっかく大御所も含めての討論会であったのだから、もっと時間を使って、フロアの意見をもっと引き出しても良かったのではないかな。少し欲求不満な会であった。
- ・抄録に示された内容がいまいちわかりにくく、参加しなかった。もう少し詳しい情報があると良かった。
- ・有意義であったが、後半の discussion は十分に時間がなかったと思う。このような重要なイベントはもっと十分に時間をとって、議論すべきと思う。また、他分野の先生からの脳科学分野に対する厳しいが有益な批判があったが、後半の discussion でその先生からの意見をさらに聞くことがなかったのは残念である。

t. 「シナプスとスパインを作る遺伝子」

- ・それぞれ、非常に有意義であったが、議論の時間が足りないと感じました。SNS などと連動して、事後も議論を継続できるようにすると良いと思います。
- ・企画そのものはおもしろかったが、ここからさらにもう一歩踏み出せるとおもしろいと思う。時間的な制約もあるでしょうが、検討下さい。

u. 脳神経科学のキャリアパスを考える会

- ・それぞれ、非常に有意義であったが、議論の時間が足りないと感じました。SNS などと連動して、事後も議論を継続できるようにすると良いと思います。

v. ポスターセッション(後半)

- ・コアタイムが 21 時までなのに、21 時までに撤収が指示されている。当然のことだけど 21 時までいる人は少ない。他のシンポジウムの空いた時間を、むりやりコアタイムに設定していて、運営のデザインがされていない。
- ・ポスターの区分が判り難い(回路脳 システム脳 の違いとは?)。
- ・ポスターセッションのコアタイムは、食事の時間帯以外にした方がよい。
- ・ポスター会場が狭く見にくかったので、もう少し余裕を持った会場あるいはレイアウトにしていただければと思います。
- ・ポスター発表 29 日のポスターについてです。コアタイムが 12:00-13:30 と 19:00-21:00 の 2 つに設定されていました。お昼のコアタイムはまずまずでしたが、夜のコアタイム時、20 時を過ぎる頃には、ポスターの半数近くが無くなっており、従ってディスカッションする人もほとんどいなくなってしまいました。他のセッションなど時間のご都合もあろうかと思いますが、寂しかったです。
- ・ポスター発表のコアタイムの時間設定に不満がある。昼食時やすでに多くの参加者が帰宅・夕食に行っている時間帯にコアタイムが設定してあった。

- ・ポスター発表の決まった時間がちょうど食事時と重なっており、参加者は発表者以外はあまり多くなかったように思える。少なくとも著名な先生方はあまりポスターに参加してなかったようにおもわれる。いずれにせよ、せっかくいろいろと新たに交流できるチャンスになり得たのに残念だと感じた。

w. 若手参加分野別将来構想討議会(分子、回路)

- ・それぞれ、非常に有意義であったが、議論の時間が足りないと感じました。SNSなどと連動して、事後も議論を継続できるようにすると良いと思います。
- ・のようなイベントは、もっと大学院生やポスドクの参加者が多い場(たとえば日本神経科学学会大会など)でおこなってもよいかと思いました。スケジュール上仕方ないと思いますが、パラレルセッションで聞きたいけれども聞けない発表がありました。
- ・企画そのものはおもしろかったが、ここからさらにもう一歩踏み出せるとおもしろいと思う。時間的な制約もあるでしょうが、検討下さい。

x. 若手参加分野別将来構想討議会(システム)

- ・あまりに一般的な研究紹介のセッションで、一部を除いて面白味に欠けた。若手に人にはもっと研究に対する enthusiasm も含めて熱く語ってほしい。
- ・せっかく先生方やポスドクなどが集まっているのですから、もっと、全体的に問題となっていることなどを取り上げて、具体的にどうすべきかを話し合う場所となった方が良かったと思います。
- ・議論の時間が少なかったと思う。
- ・具体的な研究議論というよりは研究生活といったメタな議論。個々の先生方のプレゼンは楽しかったのに、パネルディスカッションになったら、前に出ている先生方は慣れないのか、一斉に下を向いているし、陰鬱な雰囲気。進行役の先生もなにか、もの悲しげな調子、研究者に能力を問うよりは、サイエンスコミュニケーターなど進行をもっとうまくできる方が確実にいると思います。
- ・若手が学生向けなのか、若手研究者向けなのかはっきりさせてほしい。内容が学生向けに個人の研究を非常に短い時間で紹介するだけだったので、かなりがっかりした。果たして討議会をやった意味があるのか疑問。
- ・討議会となっていたが実際には学会発表と大きな差は無かった。

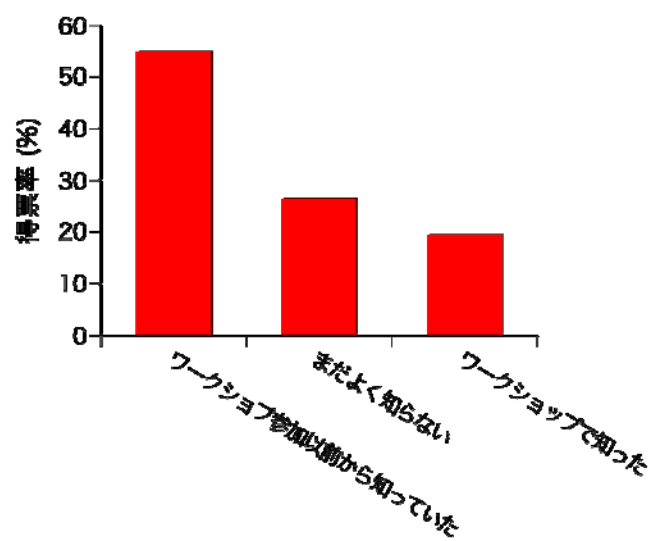
y. 若手参加分野別将来構想討議会(病態)

- ・内容は大変素晴らしいのに、参加者が少なく残念だった。

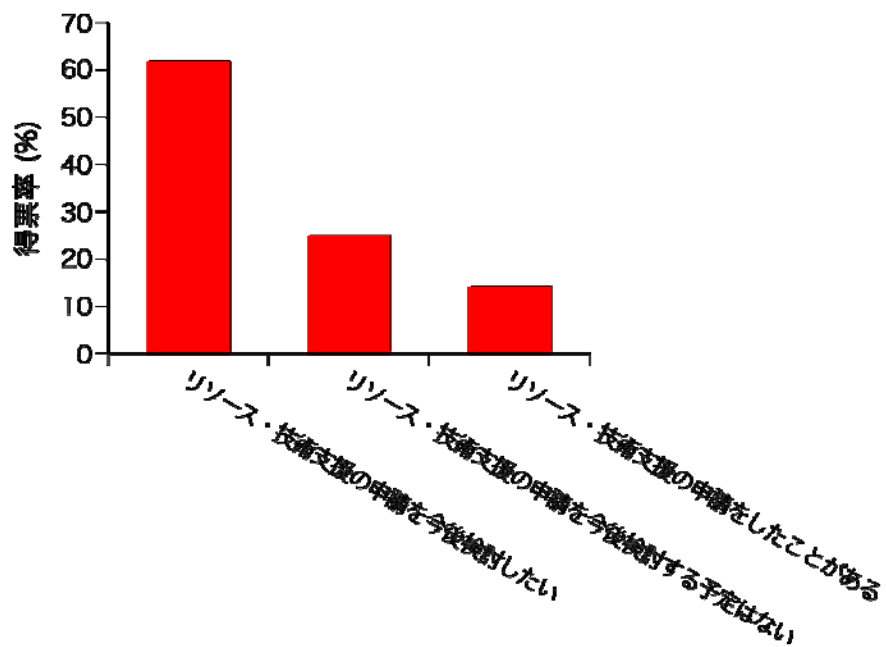
その他

- ・もう少し多くの研究発表を聞きたかったです。
- ・イベントや休憩時間と重なっていたため、ポスター発表で発表者と十分に討論することが出来なかった。
- ・ポスターセッションのコアタイムはポスターのみにしていただきたいと思いました。
- ・規模として適切だと思う。また、会場の前の方のテーブル席は前後のテーブル間の間隔が狭すぎた。
- ・似た領域の会には出られるようなタイムスケジュールだと有難いと思う。
- ・若手参加分野別将来構想討議会や「シナプスとスパインを作る遺伝子」など、普段聞けない本音の話が聞けて面白かった。
- ・全体に関し、予定や内容の詳細をもっと前に明確にいただければありがたかった。初めての試みで、7月はまだ学内や省庁などの委員会があり、内容がわからないために優先順位をつけてどれを優先して参加すべきかわかりにくかった。文化祭のように、各イベントの担当者がぜひ参加すべきポイントをアピールするような形式で参加を呼びかけてはいいかがでしょうか？ 来年からはさらに新しい魅力的な企画があると行くのが楽しみになります。
- ・脳科学の将来や研究費の取り方といった話に若手からの建設的意見はほとんどなかった。若手にはそんなことより、もっと学問上の議論を活発に行える機会を提供する方が有意義と思われる。
- ・包括圏に含まれる全ての新学術領域研究に関しても、それぞれのセッションが有れば良いと感じた。

質問 16 : 包括脳ネットワーク総括支援およびリソース・技術支援活動に関してお答え下さい。



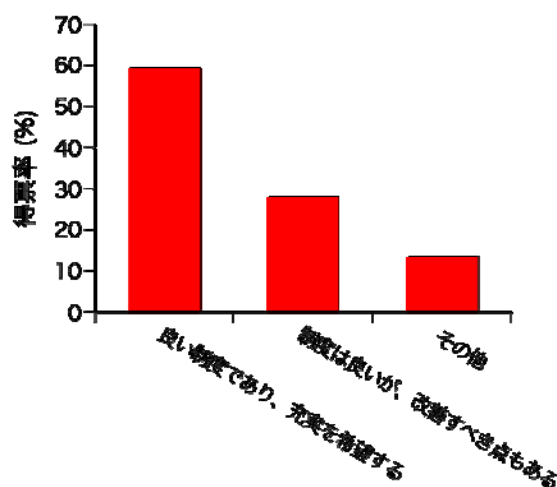
質問 17 : 包括脳ネットワークのリソース・技術支援活動に関してお答え下さい。



質問 18: 包括脳ネットワーク総括支援およびリソース・技術支援活動に関して何かご意見・ご感想があればご記入下さい。

- ・ 支援の種類と量をもっと充実させて欲しいです。特に、電気生理 (スライスや in vivo)、マイクロダイアリス、遺伝子発現解析、メタボローム解析などがあると良いと思います。
- ・ 研究遂行に必要なリソース・技術を持っていない研究者にとって、大変有難い。反面、研究の丸投げになってしまうと機能しなくなる。
- ・ 神経科学外の領域、工学系、光学系、ナノ系との研究者との窓口となるような活動もあるとよいと思います。
- ・ とても良い取り組みだと思いますので、今後未永く同様の活動が継続されることを望みます。
- ・ 多くの点に関して、大学の学園祭かと思うほどの素人運営。研究者が主体で運営しているのだから素人であることは当然なので、外部に任せざるを得ない部分を増やしたらよいと思う (それを、お金をかけずに行うことは可能です)。素人運営の具体的な 1 つとして、ホームページ。圧倒的に使いにくい。問題が Web デザインの基本的な事 (なので 1 つ 1 つは些細なことではある)、一向に改善がみられず、それでいてこのシステムを強要されるので、アタマにくる! 支援になっていない! 大学の外からボランティアを募ったり、科学運営に市民を参加させてはどうでしょうか? 仕事を引退した方や学部学生の中に、行事運営や Web デザインにおいて、研究者よりプロフェッショナルな方がいますよ。アウトリーチなどで研究者が市民に歩み寄ることも 1 つですが、市民に歩み寄りもらえる「仕掛け」を作ることも、様々な点で有用なことでは? また、大学内でも科学支援者育成のプログラムが増えているのですから、その人材を有効に使ってはどうか? 北大や次回の東北などは活発に行っている大学でしょう。
- ・ まだ支援の意図と内容について良く理解していません。(これはすべての国内の研究者を対象としているのでしょうか)
- ・ 病態脳においては認知機能におけるリソース・技術支援活動を行って欲しいと思いました。
- ・ 非常に素晴らしいシステムだと思いますので、もっと充実してほしいと思います。
- ・ 宣伝を大々的にしてほしい。包括脳ネットワーク参加者に直接メールを送るなどの方法で。
- ・ 提供される技術支援の概要など、検索しやすくし、敷居を低くして利用しやすくすることを望みます。
- ・ より充実することで、若手の研究を支援することが可能になると思います。
- ・ 講習会のようなものを企画して頂きたい。
- ・ 統合脳から行なわれていた技術支援の実際が広く認知されていなかったのではないのでしょうか? また今回技術支援を行なうにあたって、説明会の前に応募締め切りがあった事は、応募者を多く募るにはデメリットになったかもしれません。
- ・ 内容がもう少し知られていけばよいと思う。更に採択件数が増えれば良いと思う。
- ・ 現状のままで問題なし。
- ・ optogenetics など、実習コース、技術導入相談などでもらえると有り難い。
- ・ 研究の効率を最大限に上げて、脳科学の世界的な進歩に我々のすばらしいアイデアをどう生かしていくのか、という姿勢の一貫としてさらに推進していただきたいと思います。
- ・ リソース・技術支援が受けられる対象動物が限られているので利用し難い。
- ・ 包括脳メンバーだけでなく、神経科学全般の会員にも広く宣伝が必要。
- ・ 非常に重要であるため、より充実させてほしい。
- ・ 班会議の会員ではない、もしくは研究資金が十分でない研究者にも研究推進の機会を提供するという点がすぐれているとおもう。同時に、このような研究の「すその」をひろげることは有意義であるとも思った。
- ・ 実際に支援を受けられなかった場合でも、技術相談に乗っていただけると、とても嬉しいです。その場合には、支援班の方々の負担が膨大になることが予想されますので、共同研究になるとかなんらかのメリットが必要だと思います。
- ・ 包括脳として何をしたいか具体的なものが見えてこなかった。結局みんな研究費からみで来ている気がする。それゆえ、ばらばらなものを場所だけ一緒にやったという感じで、別の場所でやったのとどこが違うのか分からない。結局、包括脳の存在意義自分分かりません。あとわざわざ北海道で開催する必要があるのか疑問です。東京でやれば出張にかかる全体の研究費の額を抑えられたはずで。
- ・ 技術支援活動などの活動は他にはあまりなく、是非とも拡張していただければありがたいです。
- ・ 支援される側は、多くの支援者が手弁当で支援を行っていることをよく認識すべきである。支援される側は、深い感謝の念を持って、支援者にマンパワーや研究費をささげるくらいの気持ちでなければいけない。
- ・ 何を行っていて、具体的にどのような支援をどのような形で得られるのか、多くの人にとって明確でないように思われる。

質問 19: 包括脳と神経 3 学会による優秀若手賞についてお答え下さい。



質問 20: 優秀若手賞についてのご意見がありましたらご記入下さい。

- ・ 知る範囲において妥当な採択と思われた。
- ・ ホームページ上での一般会員からの投票も参考にするようにすると良いと思います。そうする場合は、十分に事前にアナウンスする必要があります。
- ・ 評価者は、責任を持ってポスターを見て評価すべき。若手研究者はそれを見ている。
- ・ もっと多く数を増やしてもよいと思う。
- ・ 別段、若手に限らなくても良いと思うのですが、そこには何か意図があるのでしょうか？ また、総じての評価を与えるのであれば、誰でも投票する権利があっても良いのではないのでしょうか？
- ・ 1人の発表者について、審査は1人ですか？ もしそうだとしたら、少なくとも3人くらいに増やしてほしい。何でもそうだと思いますが、選考しているのなら、採択理由をきちんと公示しなければ、ただの宝くじではないのでしょうか？
- ・ 病態については、一つのラボに偏っていた気がする。
- ・ 審査員が正当に審査したのかが気になります。(私は、できる限り公平に審査しましたが)
- ・ 励みになるので続けていただきたいと思いました。
- ・ 評価が不透明。
- ・ 学生に限定するか、学生用とそれ以上を別の賞とし学生用を充実するなどして、学生側に重点を置いたものにする方がいいと思います。
- ・ どういう基準で決めているのか知りたい。
- ・ 受賞ポスターのどこが良かったのか、あるいは受賞できなかったものはどこが悪いのかに関して意見を公表していただけたら良いと思います。
- ・ 募集に関して、宣伝をもっと大々的にしてほしい。
- ・ 応募者の数に合わせて賞の数を決めるのは変。各分野から厳選されたものを選ぶべき。
- ・ 審査に関しての透明性が低い。
- ・ 個々のポスター等に対する、選考理由などの簡単な評価者のコメントなどがあればなお良い。
- ・ 難しいです。若手をどのような定義でとらえるかが難しいです。自らプロジェクトを動かしている人と、そうでない人を同時に比較できるかなとも思います。
- ・ 優秀賞を紙で張り出すだけでなく、表彰式をすればよいのではないかと。
- ・ ポスターの時間がまんば。初日、2日目、それぞれ夜中まで徹底討論して、3日目の懇親会で表彰というのがベスト。
- ・ これからの若手を育てるためには、いろいろな評価がどのようにされているのか、透明性を確保することが重要だと思います。努力してよい仕事をすれば正しく評価されるという経験をするためにも審査過程など透明化してあげてください。
- ・ 事前あまり告知がなかったように思うので、今後はもっと盛大に告知をすれば、若手の参加も増えると思う。
- ・ 優秀賞に該当しなかった場合でも、問い合わせれば審査結果を教えてもらえると今後の役に立つと思います。
- ・ 選考理由が良く分からない。選考をもっと早くして、受賞者名は、懇親会で発表するとかしたほうが良かったと思う。受賞した人は、

- ・母数が少し少ないのではないのでしょうか？
- ・審査を早くし、ワークショップの場で顕彰する機会を設けてほしい。
- ・審査の基準を明示する。
- ・若手の研究を奨励する意味で大変によいと思う。発表のための旅費のサポートがあればさらによい。

質問 21: 来年の企画に向けて、イベントの改善すべき点がありましたら、ご意見をお聞かせください。

- ・日本神経科学会との差が不明確 懇親会の参加費が高い。
- ・夜9時までやるのではなく、午後7時や8時などに終わるほうがよいのではないかな？
- ・一般向けの企画を何かやったほうが良いのではないのでしょうか。
- ・同時進行するイベントが多く、興味あるイベント全部には参加できないのが少し残念であった。また、ポスターセッションは食事時間帯のみだけでなく、別に時間を取って、しっかりと評価するべき。
- ・今年上がってきた様々なアイデアを一步でも具現化していくような発展的なイベントがあるとよいと思います。
- ・通常の学会（日本神経科学会）とのすみ分けをどうするか課題であると思います。今年は参加者が多かったようであるが、来年からはどちらかを選ぶ人も増えるかもしれない。（時間や旅費、そして内容の都合で。）ポスターのコアタイムが12:00-13:00 および19:00以降と、あまり人が集まらなさそうな時間であったので、改善の余地があると思います。
- ・あいにく他の行事との関係で参加できませんでした。もし年中行事化するようであれば、今後早めに日程が決まると良いと思う。ところで、科研費やJSTなどをベースとした企画であるように思いますが、予算支援だけ受けて可能であれば国内研究者の自由な参加形態にすべて変えることは可能でしょうか。参加しなかったので、プログラムだけを見ての意見ですが、たとえばイベント内容でこの研究費の課題のように色分けすることに違和感があり、国内の神経科学研究を支援するように理解できません。
- ・時間調整をもっと工夫して欲しい。
- ・例えば「システム脳」のように、分野(対象生物?)によっては言葉が意味するものが思っていたものと違うので混乱することがある。異なる分野の研究者が会話をしている際には障壁になる可能性があるのも、もう少し丁寧に説明して欲しい。
- ・脳プロや新学術はちょっと中に入りにくい感じがしたので、もっとサテライトの感じにしたいほうがよいかなと思います。
- ・登録を簡易にしてほしい。
- ・分子・細胞とシステムの融合の場 具体的には、別会場で行うイベントをやめ、1会場で両領域の参加型のイベントを行う。もっと早い段階で、どういうプログラムで会が開催されるのか通知して欲しい。また、プログラムの内容も参加登録のかなり直前まで分からなかったため、詳細な内容も決まった段階でできるだけ早く通知して頂きたい。加えて、ポスターセッション（とくに発表者が立っている時間）を他の学会同様しっかりと決まった(食事時以外の)時間で行うようにセッティングして欲しい。
- ・tのような、ふつうの発表会ではないようなイベントを充実させてほしいです。
- ・ポスター会場の人気がいまいちだったように思われますので、改善をお願いします。
- ・コーヒープレイクがないのは寂しい気がします。また、懇親会の参加費が8000円（学生でも6000円）というのは少々高すぎる気がします。若手がたくさん参加して盛り上がるというためにはもう少しハードルが低くあるべきだと思います。
- ・興味のある発表が固まっている時がある一方、あまり興味のない発表の固まっていることもあった。プログラムを上手く分散させてもらえるとうれしい。ポスターのコアタイムでは、なるべくポスター発表やポスターの閲覧に時間をかけたいため、ほかのセッションとなるべくかぶらない方がいい。
- ・冊子の編集はプロに頼んで欲しい。
- ・できれば北海道で続けてほしかった。
- ・もう少し時間的な余裕が欲しい。
- ・日程とそれぞれの内容に関する告知が遅く、出張計画を立てるのが困難であった。
- ・懇親会に関して：会費を下げるか、もう少し参加人数に対する食事の量を充実させてほしい。あれでは政治家の資金集めパーティーと言われても仕方ない。
- ・ポスター発表をもう少し充実させてほしいです。やはりポスターの前に人が多く集まる時間を設けて下さるといいと思いました。宮下先生も仰ってましたが、包括脳を統合脳のような縦割りではなく、記憶とか匂いとかのテーマ毎に横断的に見る企画があると良いのではないのでしょうか？とくにポスター会場でそういうのをenrichすると良いのではないかなと思いました。
- ・発表時間を20分程度に短縮してもよいのでは？30分だとやや冗長な講演がありました。
- ・海外からの研究者による講演を希望します。

- ・ 上述しました。
- ・ 期間が長すぎる。各領域が別々にワークショップを持つのではなく、横断的な交流ができれば良いと思う。若手討論会は統合脳の分野を超えて議論すべきだとおもう。
- ・ 今年度は初回であったためいろいろな戸惑いもあったが、それは新たな学会に参加するときの気持ちに近いことがわかった。運営自体は統合脳の延長的であった印象なのでよかったが参加人数が多く入れない会場もあった。
- ・ 学会を補完する意味で、存在意義は大きいと思うが、今後参加者が増えて行った場合に、学会と何が違うのかという疑問も起きてくるかもしれない。そういう意味では、発表会場と宿泊を一体にして、そこに缶詰にして行く合宿のような形式がいいのではないだろうか。不評だったが、統合脳の1年目の夏の班会議は、そういう意味では評価されると思う。
- ・ PI 手前程度の準若手クラスが交流しやすいようなイベントが欲しいと思いました。
- ・ あるイベントで急ぎょ会場係を頼まれた。複数の領域が合同で参加しているせいか、運営の責任の所在が不明確なように感じた。また、後半のポスターセッションで発表をしたが、コアタイムが短い時間だったため、ほとんど聴衆がいなかった点は改善してもらいたい。
- ・ 参加登録手順の煩雑さを改善して欲しい。所属や現在の参加状況によらず、登録窓口を一本化して欲しい。現状では登録窓口がパスワードで保護された内側であり、新規の参加希望者本人だけではどうしようもないシステムになっている。
- ・ フリーの飲み物を用意してほしい。

質問 22: 来年の企画に向けて、具体的なイベント企画案がありましたら、ご意見をお聞かせください。

- ・ 異分野の交流。
- ・ 神経科学外の領域、工学系、光学系、ナノ系の研究者とのクロストークができるようなセッションがあるとよいかなど。人選が大変かもしれませんが、あと、若手研究者の悩み・希望をたたき台にした討論会があってもいいかもしれません。
- ・ 神経3学会またはそれ以外の周辺学会との合同ワークショップ（ディスカッションを中心に）を行ったらさらに幅が広がってよいかと思えます。
- ・ 若手優秀者に賞をあげるのであれば、同様の選考基準で選ばれた人による研究発表のセッションがあったらおもしろいと思う。
- ・ 大学院生やポスドクを含めた若手研究者による発表の充実。
- ・ 再生医療_ターゲット疾患の病態メカニズムから再生医療への具体的なアプローチ グリア_発生からその機能まで(どこかで聞いたかも)
- ・ いろいろありますが、またゆっくり考えて提案したいと思います。
- ・ 今後の進捗を考えながら企画案を提案していきたい。
- ・ PI 手前程度の準若手クラスが企画できるようなイベントがあると良いと思いました。偉い先生にも話していただきつつ、これからPIになっていく世代での横のつながりを作れるような勉強会が理想的です。分野横断的な共同研究ができると、自分の研究の幅が広がって良いと思えます。
- ・ 将来脳機能研究に応用できるかもしれない新たな装置開発、新しい方法論についてのセッションがあってもいいと思う。本ワークショップではとくに問題になっていた三つの指定席のうちゲノム計画では、DNAポリメラーゼをはじめとする新たな酵素群や試薬、ハイスループットDNA抽出装置やDNAシーケンサの開発、情報処理技術の発達がタイムリーにゲノム計画と並行して産学官で行えたからあの時期に成果を上げられたと考えている。今回のワークショップで感じたのは、従来からの手法は十分こなれており、それらを用いた成果をみなさん出しておられるように見受けられました。飛躍的な発展を期待するなら、新たな方法論、装置の開発にもう少し重点を置いてもいいのではないかと言うのが私の意見です。特にマイクロ、ナノ技術、biophotonicsに関連する工学的な側面、しかしそのような工学分野の研究者は基礎研究への応用は全く考えておらず、実は利用できる技術がたくさんあるのではないかと考えられます。また、基礎研究と応用研究の両輪がうまく回ることを重要と思います。言うまでもなく国民は、その研究が自分たちの暮らしにどのようにかわってくるかに興味があるのであって、それを実現するための基礎的な研究には理解を示します。医学面での活用のみならず、産業面での展開が可能となることを目指すことが基礎研究発展の原動力となると確信しています。

質問 23: 包括脳ネットワークホームページと Researchmap に関して、何かご意見・ご感想があればご記入下さい。

- ・一つのパスワードでアクセスできるようにしてほしい。
- ・複雑で使用困難であり、時間もとられ大変苦痛でした。根本から見直して頂きたいと思います。
- ・登録が煩雑。
- ・大変有用である。
- ・どうも連携の仕方がよくわからない。
- ・レイアウトやボタン等、煩雑に思えるので、もう少し使いやすいと思います。
- ・ホームページがもう少し使い易いと思います。
- ・よくできています。ただ、ポスター発表などをアップロードするときなぜか添付ファイルがうまくアップできなかったり、不具合がありました。こちらの問題かもしれませんが、他のサイトではできますので、何か改善していただければ助かります。
- ・難解である。業績などを書き出す必要を感じない。
- ・とてもつかみづらく、わかりにくいところが多い気がする。
- ・意欲的な試みですね。
- ・参加しているが、有意義な使い方がよくわからない（特に Researchmap）。どのように使用すればいいか、もう少し説明が欲しい。
- ・researchmap と包括脳の関係が分かり辛い。
- ・正直なところ私は有用に活用しているとはいえない。この手のものは便利な機能を積み上げていくと、スキルの低いものはおいて行かれる。
- ・もう少し会員以外のアクセスをよくした方がよいのでは？
- ・もう少し、使いやすくなるように、改良をお願い申し上げます。
- ・アカウント作成までの手続きがやや複雑。もっとシンプルなものにしてほしい。
- ・包括脳ネットワークホームページと Researchmap の両方に会員登録しないとワークショップに参加できないのが不便である。
- ・web による登録方法が煩雑なので改善してほしい。ブラウザによってはログインの画面がでないことがあります。自分のデータを修正したいとき、どうすればよいかわからない。また、いろいろなデータベースが内部に併設されていて、わかりにくいと感じます。うまく統合して、全体がわかりやすく、アクセスしやすくなることを期待します。
- ・互いのログイン ID / パスワードは共通にするか、もしくは統一システムとした方が便利だろうと思います。
- ・あまり情報がまとまらない段階で早めにアップされていくのもいいかと思います。
- ・包括脳ネットワークへの参加に、まだ敷居が高いと感じている脳研究者が多くいるようです。また、学会の年集会との違いを明確にすることにより、ワークショップに参加する意義をもっとアピールすべきではないかと思う。
- ・整備ありがとうございます。活用しきれておらずなげない。
- ・包括脳の招待による会員制登録はわかりにくいのでもう少し簡便にしていきたい。
- ・より活用していきたい。
- ・関係者のご努力に感謝申し上げます。ただ、神経科学者 SNS など、他のネットワークも並立している状況なので、一本化していく方向に努力すべきだと思います。
- ・FAQ が追加されましたが、まだ二つの ID が必要な理由が分かりません。researchmap の ID だけで、包括脳のコミュニティに入れたら良いのでは無いのでしょうか？なんのために包括脳ネットワークに入会するのに時間をかけているのかが分かりません。researchmap の情報も、各個人がホームページで公開しているのにわざわざ入力しなおすのが非常に手間でした。他のサイトから引用できましたが、結局手作業で修正が必要なのであまり意味が無かった。最近コミュニティに入るのに推薦が必要ではなくなったようですが、どうして始めからそうしなかったのでしょうか？しかも推薦してもらったにも関わらず、結局手作業で登録することになりました。システムを作るのは非常に大変だと思いますが、システムを作った人は実際に登録作業とかをやってみて不便に思わなかったのでしょうか？もしテストする時間が無かったのなら、今回は見送って、来年から使用するのでも良かったのでは無いでしょうか。researchmap のつながりはおもしろいと思うのですが、改善の余地があると思います。せつかくの map といっているのに map 上になっていないのが非常に残念です。他の人のつながりも含めて map 上に一覧で見れるといいと思います。
- ・窓口、情報の分散した現状を一本化すべき。
- ・本アンケートであるが、途中で回線が切れたり、間違ったキーを押した場合は、誤って送信されたのか、単に入力内容がクリアされたのかわからない。一時保存できるようにしてほしい。
- ・この学会に参加するために、Researchmap と包括脳の両方で参加登録しなければいけないのは煩雑である。一度に登録できるような仕組みを希望する。
- ・会員になるための方法がきわめてわかりにくい。もっと簡便にできないのだろうか。方法における invitation の仕方についても理解できるまでかなり時間がかった。また、ホームページ自体も見やすいとはいえない。

質問24: 夏のワークショップのオーガナイズ全般について、何かご意見・ご感想があればご記入下さい。

- ・懇親会の会費が高い割に料理が少なくほとんど食べることができなかった。改善を希望します。
- ・従来型の班会議と比べると、予想以上に良かったと感じました。英語のセッションも設け、もう少し国際化してもよいかもしれません。ただ、将来構想討議会のようなものは日本語のままがよいと思います。また、将来構想討議会のようなもの一部は、U-streamで生中継を行うセッションも設けるとよりオープンになり、また会場に参加出来なかった人も参加することができ、より有意義になると思います。
- ・今年は、非常に革新的でまた参加したいと思えるものでした。これまでの統合脳班会議では、いかに自分の研究が進んでいるのかといった進捗状況をひたすらに発表している感が強く。そこには、それぞれの研究者が何が今したいけれど、できないのか？それがなぜできないのか？といった問題の共有化がなかったように思います。それを今回できたように思います。
- ・ポスターの時間設定ですが、なぜ、昼ご飯と夜ご飯のタイミングなのでしょう？せめてそのような時間は外すべきではないかと思えます。
- ・オーガナイズされた先生方にお礼を申し上げます。
- ・もっと単純にできないものかと思えます。
- ・一般の脳科学者がもっと集まりやすいようにしていただければ嬉しく思います。
- ・posterの抄録の閲覧がもっとスムーズにできれば良いのと思った。キーワード検索などができたら良かった（もしできたのだとしたらやり方がもうすこしわかりやすかったら良かった）。
- ・オーガナイザー、協力者の方々の活動を高く評価したい。ご苦労さまでした。
- ・夏の暑さは厳しいですが、交通の便を考慮して、会場は東京もしくは大阪あたりを希望します。
- ・今回の会場はやや狭い印象を持ちました。もうすこしゆったりとした会場できると良いと思います。
- ・プログラムが複雑で、プログラム冊子もわかりにくかったです。全体のタイムテーブルが描かれたものが冊子にあると良かったかと思えます。
- ・御苦労様です。
- ・様々な分野の方が集まっていたが、交流が盛んに行われたかと言えば、それほどでもなかったように思う。
- ・オーガナイザーの負担が多少偏っており、特に負担が大きかった担当者が気の毒な気がした。
- ・時間通りに進められていてよかったです。
- ・冊子の編集がひどい。何もそろっていないし、とても使いにくい。プロに頼んだほうがよいと思う。懇親会が高い。食事が少なかった。
- ・技術支援をコアにした、実践的な実験Q&Aなどが有っても良いかも。
- ・ご苦労様でございます。できれば、東京等で開催して頂けるとより参加しやすいと思われれます。
- ・オーガナイザーの皆様、有り難うございました。大きな会を開催するのは大変だったと思いますが、有り難うございました。ただもう少しオーガナイザーの顔が見える会の方がいいかもしれません。
- ・ポスターdiscussionが最後の時間になっていると、その前ご撤去してしまう人が多く、discussionにならない。もっと人のいる時間の方がよい。
- ・サイエンスのみならず、研究の進め方や研究費に関する議論がなされたのは、独自性があってよかったと思う。このような点はなかなか学会では取り上げにくいものである。
- ・上述しました。
- ・お疲れさまでした。
- ・ありがとうございました。とても勉強になりました。また、偉い人達のお顔を身近に拝見できて、嬉しかったです。
- ・ほとんどの人は前半だけで帰ったので、後半のポスターセッションにはほとんど人がいなかった。ポスターセッションは全部同時やるべきだと思う。場所の問題なら場所を確保できるところでやるべき。新学術と脳プロは前半と後半に分けた方が良かった。
- ・今年は参加したいイベントが重なってしまったことが残念です。
- ・ポスター発表の時間を空き時間ではなく別に設けるとよかったと思います。
- ・脳プロは、それぞれに参加する人数が把握されていなかったのか、すいている部屋と混んでいる部屋の差が激しかった。
- ・今回、他の領域のイベントに参加したかったが、全く同じ時間イベント開催があったため、参加できなかった。包括脳として集まっている意義を感じ無かった。是非すべてのイベントに参加可能なProgramにして欲しい。
- ・初めての試みであったが、大変よくオーガナイズされていたと思う。
- ・複数のセッションが同時進行すると、聞きたいものが聞けないということが多くなる、また、異分野交流という観点からも望ましくないのではないかと思う。単に同時並行的に行っているだけでは異分野交流とは言えない。(最近の学会年大会でも同様の現象が見られるが。) 懇親会は、全部のポスターの説明(少なくとも一部時間)が終わった後の方が良いと思う(よりよく知り合ったり議論を深めたりしやすい)。

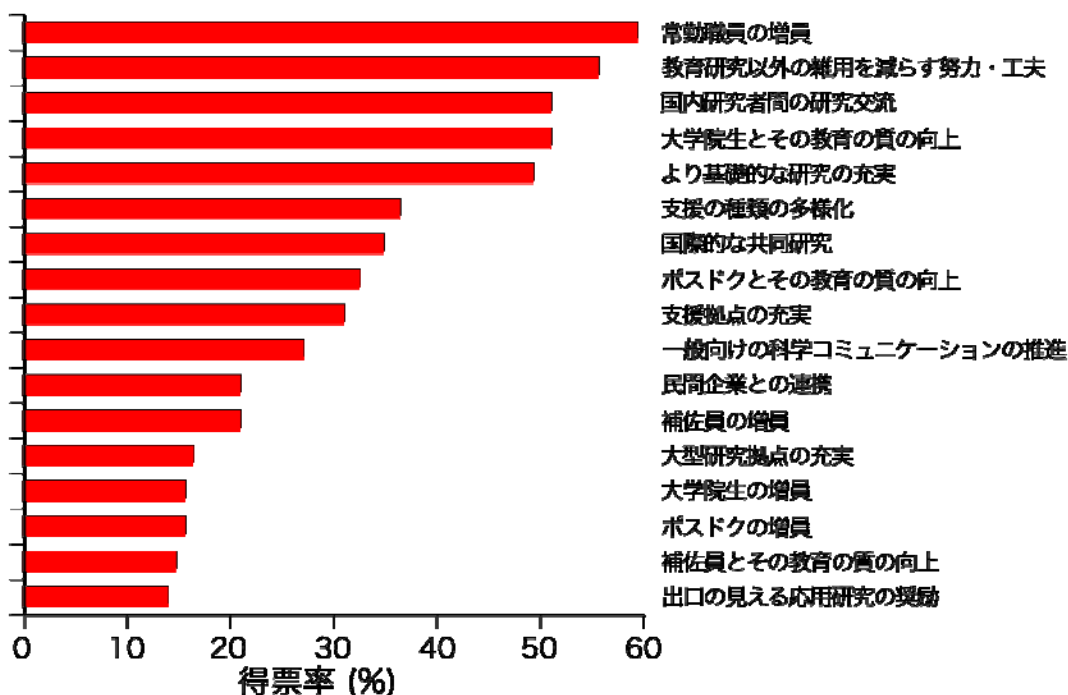
質問 25: 夏のワークショップの科学的な面について、何かご意見・ご感想があればご記入下さい。

- ・ プレリミナリーな結果でも発表できて議論できるような雰囲気を作ってほしい。
- ・ 技術・ノウハウの共有化の積み重ねを促進していく機会があると皆参加したいと思うのではないのでしょうか？ 誰が、どのような技術やマテリアルをもち、それをどこまでシェアさせてくれるのか？ そういうことをもっと分かりやすい形で話し合いができると素晴らしいと思います。
- ・ 学際的な討論の場があると良いかもしれません。つまり、分子、回路、システム、病態の人がもっと混じり、互いに教え合いまた刺激を受ける機会があると良いと思います。例えば若手だけでも良いと思います。
- ・ もっと幅広い分野の研究者が集まるようにしてほしい。現在は生理学に偏重している。津田さんの新学術領域に参加している方々は、生理学、心理学、情報、物理、数学など幅広い分野から集まっているように思いましたが、情報や数学の方々は他のプログラムにはあまり参加していないように思えた。その方々の問題か、プログラムの問題かはわかりませんが。
- ・ 充実していたと思います。
- ・ ここに来たら何か最先端のことが分かる、という会合になるといいと思った。発表データばかりではあまり活発な会合にはならないと思う。せつかくある程度限られた数の身内（日本人）だけで集まっているのだから、もっと刺激的な内容を紹介していただくことは可能ではないだろうか。そしてそうすることで、この会合の本質的な（学術的な）重要性がより強くなると思う。
- ・ ポスター会場の各々のポスターに、短くて良いが、発表者がその場において、説明できる時間（時刻？）を書くようにした方が良いと思う。一律に時刻を決めるのは発表者に負担を強いるので・・・
- ・ ターゲットが広い分、異なる分野の話が聞けてよいと思うのですが、分野が違いすぎて話しについていけない部分が多かった。少し分野の異なる人向けの導入レクチャーなどが会ってもよいかと思いました。
- ・ 科学的レベルの向上のため、活発な議論を望む。
- ・ せつかく脳研究の全ての分野が集まっているのだから、その全体がこれから研究をすすめることでどんなふうにつながっていくのか、という全体像をつかめる夢のある話がきいてみたい。
- ・ 各研究者のトークだけでなく、総合ディスカッションの時間を設けてはどうか。
- ・ グラントの縛りが無い分、最近のデータに関する話題が乏しかったかもしれません。
- ・ 学会との住み分けが難しいかもしれないが、もっと先端的な発表が聞ければよかったように思う。こちらではより preliminary なことを話すようにすれば、魅力が出るかもしれない。
- ・ 科学的な面？
- ・ 外国からのスピーカーの講演も聞きたかった。
- ・ 今回は参加できなかったのですが、SFNの大会のように、本会議に合わせて、ゲリラ的に小さな集会在いくつも開催されるようになると、科学的なコミュニケーションも進むかも知れません。そういう意味では、ワークショップ前から期間中も自由に閲覧、書き込みの可能な掲示板があるとよかったのかも知れません。
- ・ 若手参加分野将来構想討議会（分子、回路）では、冊子では、「構造的なことよりは、むしろサイエンスを中心とする」ということでしたが、実際には「構造的なこと」についての議論が多かったように思いました。特に、若手が構造的なことに関する不満や提言をしていたことが印象的でした。サイエンスを中心とした議論に参加したいです（来年までに参加できる実力と度胸をつけておきます）。
- ・ 同時並行して複数の企画を進めるより、目玉となるものを少数並べてほしい。

質問 26: 来年のワークショップのプレナリーレクチャーの人選・内容について、何かご意見がありましたらお聞かせください。

- ・ 竹市先生
- ・ U-stream で生中継を行うと良いと思います。
- ・ active でユニークな若手
- ・ 今年のような優れた先生を、来年も選んでいただきたい。
- ・ 様々な分野の人が参加しても興味を持てるような内容がよい。
- ・ お任せします。
- ・ いろいろありますが、今日は忙しいので別途提案させていただきたく思います（今日が締切りということなので書いておきます）。
- ・ 今年の人選は妥当だったと思います。現役の先生の話は学会でも聴けますので、引退して学会にも顔を出されなくなったような大御所の先生などに、ご登壇願って、歴史と将来構想に関して、少し現役から離れた立場からのご意見を伺うというのも、いいのではないのでしょうか。
- ・ 異分野（神経以外）の話を開きたいです。そして、その先生と脳科学の人達がどのようなディスカッションをされるのか？を見たいです。柳田敏雄先生は第一候補です。

質問 27: 脳科学研究をこれから更に推進するために必要な要素はどれでしょうか(複数回答可)。



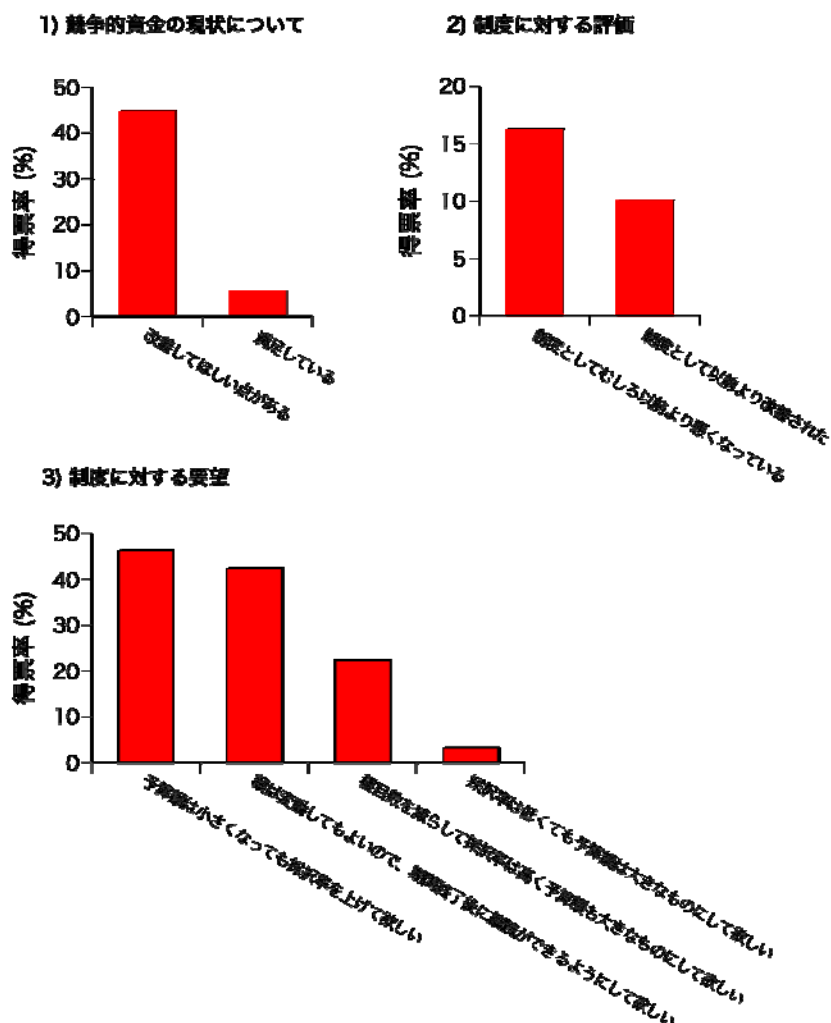
質問 28: 脳科学研究の将来の発展に重要と思われる要素について自由にご意見をお書きください。

- ・ 研究者が安心して、長期的にハイリスクな研究に没頭できるような環境を、研究者コミュニティが一丸となって整備していくことが重要だと思います。教育研究以外の雑用を減らす努力・工夫も非常に大切。
- ・ 研究成果の社会への還元。
- ・ 大型でなくてもよいので、中・長期的な研究費支援体制。および、少人数（一名）でもよいので長期的な研究員または補助員の雇用の確保。
- ・ 神経倫理学の充実。脳科学が持っている負の側面を謙虚にわきまえた科学者の育成。
- ・ 新しい技術のほとんどは可視化技術に依存していると思います。そのような技術開発の推進が重要です。一方で、出てきたデータをどのように解析するのかを検討すべきだと思います。各データをどうやってとりまとめて統合的な知識体系にするのかを考える必要性があります。
- ・ 脳科学は研究スタイル・テーマの多様性が魅力であるが、まとまりにくい、分かりにくい、と言う意味では欠点にもなり得る。社会にその必要性を認めてもらうためには、包括脳のような組織からの国民に対するシステムチックなアウトリーチ活動（書籍、インターネット、教育への応用）が必要ではないか。研究者個人の活動だと、どうしても専門的、もしくは断片的になりやすい気がする。長期的には、もっと一般の人に脳科学を分かり易く説明し、身近で重要な学問・課題だと認識してもらうことが重要であると思う。
- ・ 教授の中にも、あきらかに議論をできていない方がいます。早々に引退を勧告しても良いのかと。一方で、優秀な方は年齢にかかわらず、在籍されても良いと思います。これは、教授にかかわらずポストドクまで含めて言えるのですが、それぞれで求められる研究レベルを維持できなかったら、一度降りてもらってはどうか。もちろん、復帰も可能にして。端から見れば優秀だと思われる人がいまだに海外でポストドクをしていたり、海外で教職のポストに就かれているのを見ると、少し日本に希望がない。
- ・ 科学研究費について、トップダウン型や特定分野・領域・目的などを指定したり、それに組み入れたりする種目が比較的に増加したり大型化している傾向を感じます。もっと自由に研究できる予算枠の増加と合わせて支援環境の充実も、新しい目の誕生や独創性、独自研究の発展などには重要であると思います。逆に、コンソーシアムによる大規模研究や、ゆるいネットワークをもった研究スタイルなどは、これまで日本にはなく、総合的、統合的な研究でブレークスルーを生み出す可能性を秘めており、今後の日本の研究を進展させる上で重要であると思います。
- ・ もっと国民の理解を求める必要があると思います。

- ・安心して研究に打ち込める環境作り。
- ・標準言語として英語の使用を推進する。特に、海外の研究機関や研究者への売り込みが必要と考える。
- ・自分の研究領域に精通し、精緻な研究を行うことを前提とするが、周辺領域についても十分な知識を持ち、新しい概念や方法に挑戦することが将来の発展に重要と思う。
- ・現在、多面的に研究を実施するためには、かなりのお金がかかってしまいます。これを少しでも改善する一つの解決法として、研究支援拠点を充実させることが必要かと思えます。例えば、電子顕微鏡、電気生理、行動解析など、専門性の高い研究は共同研究の形で行えるようにしてほしいです。そうすれば、自前で各実験装置を購入しそれを使える人を雇う必要も無くなります。なかなか難しい面もあるかと思いますが、個々の研究者の強みを活かし、有機的に運営できるようなものがあると、日本の脳研究がかなり進展しそうな気がします。脳科学だけでなく、他の分野（情報系、心理系など）とも協調できれば尚いいと思います。
- ・学際的なアプローチが重要だと思います。
- ・各研究機関でのコアファシリティの充実と若手研究者の安定的な雇用が重要だと思います。有望な若手にコアファシリティの運営をデューティとして任せ、その一方で独立性のある研究室を主催させることができれば脳科学研究全体にプラスとなると思います。”
- ・心の広さ、異分野交流。
- ・視野を広く持つこと。具体的には、エスタブリッシュされた研究者自らが、率先して従来の専門性を越えた領域で研究活動を開始し、成果を挙げること。
- ・国の政策として、大学や研究機関における in-house の core facility (いわゆる共通機器、特に高額のもの) をもって充実すべき。(評議会が出た話の受け売りだが、重要だと思った)
- ・競争的資金も重要ですが、資金作出(お金を生むこと)も最重要なのではないでしょうか。研究資金として税金が費やされてきましたが、税金由来の資金はますます少なくなるのかと予想されます。そこで少しでも税金に依存しない予算工面方法が必要になるのではないのでしょうか。はやい話ですが、研究するにも「商売」が必要ということになります。それは、利益が要求される企業の研究部署が連想されますが、利益を上げる研究のみに淘汰されるのであれば、未来は無くなってしまいます。そうではなく、研究室(または事業)の資金の一部については、何か商売をして稼いでいく必要があるのではないかとということです。また、国民、一部の大企業、大富豪などに対して、「将来こんなスゴいことができます。だからお金を出してください。税金や提供資金を使っても文句はありませんよね。」という雰囲気でも通用したところが今まではありましたが、将来はどうなるかが心配です。商売を実施する姿勢から評価し、少しの(微小な?)利益を上げていくことも評価していくことが必要なのではないでしょうか? こいったことも今後お金がなくなる日本のサイエンスを支えるはずで、新しい日本のサイエンススタイルを、できるだけ早い段階で、確立していくことが必要だと思います。
- ・大学院生を含む若手研究者への教育の質の向上。また、意見交換の場を増やすこと。
- ・支援拠点で行う研究が充実し、活発化することが、重要と感じます。
- ・初等教育・中等教育段階の児童・生徒でも参加できるイベントなど、社会に対し広く科学研究を還元していくような姿勢が、新しい世代を育成するうえで必要なことと思われる。
- ・実験をするヒトと解析をするヒトの間を取り持つこと。科学的に有意義な研究に投資すること。特に若手の研究者の雑務を減らすこと。
- ・国際競争力のある偉い先生には海外に進出することも考えていただく。
<http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/renai/20080705-OYT8T00243.htm>
- ・大型拠点研究を増やすのではなく、相互に研究交流のある小型研究拠点を増やし、各研究者の独自性を伸ばす環境を構築していくことが重要であると考えている。
- ・優秀な研究者をある程度確保するためには、大学院生を確保することが重要だと思われる。学生数が減少している現在、基礎的な研究の大切さを啓蒙する必要があると思われる。さもなくば、中国、アジアの留学生に席巻されるのでは、もちろん悪いことではありませんが、日本的な強みも減少するでしょう。
- ・自分の専門ですみませんが、脳画像
- ・東南アジア系の大学では、インフラの設置が急速に進みつつあります。日本の大学の旧設備の更新を積極的に進めないとこれからは遅れをとるのではないのでしょうか。
- ・個々人の自由に委ねられてきた脳科学(神経科学)コミュニケーションについて、研究者コミュニティのレベルでコンテンツを保証する制度を作り、マスコミ受けのみを狙ったかのような怪しげな情報発信を牽制するべき。
- ・大型プロジェクトにばかり資金を投入するのではなく、研究費を分散させる必要がある。
- ・研究者の数を増やせる状況を作って欲しい。理科離れが著しい若世代に安心して生活ができる状況を作って欲しい(安定職、給料制度など)。何らかの理由により研究から離れた人(結婚、移転、出産など)の復帰をサポートしてくれるホームページや機関などを作って欲しい。
- ・日本における脳科学が何をして来たのかのレビューをしてほしい。日本人研究者が行なって来た研究による、脳科学の概念をレビューしてほしい。
- ・安定した研究資金と雇用。
- ・いろいろありますが、今日は忙しいので別途提案させていただきたく思います(今日が締切りということではいそいで書いております)。
- ・学部学生からの教育を軽視してはならない。しっかりとした解剖・生理の教育を医学部だけでなく、薬学他の学部の必要に思う。光

- ・ ヒトを使った研究が不可欠であると考えます。
- ・ 脳科学の将来と新分野創成センターのシンポジウムは勉強になった。やはり、脳科学はこれからの課題にチャレンジできるツール等が随分そろってきたと思った。もし支援拠点等の活用やコミュニケーションが円滑になれば、特に若手研究員には大きな課題へチャレンジしやすくなるのではと思う。
- ・ 脳科学を研究に興味を持って訪ねてくる学生は多いにも関わらず、そうした学生を十分に取り込めていないように思えます。巷間で流布されている擬似脳科学的言説と実際の科学の現場を繋ぐ橋渡しの取り組みは、まだまだ足りないと思われます。世間の脳科学に対する興味が薄れない間に、積極的に取り組まなければ、せっかくの脳科学熱も冷めてしまうのではないかと危惧しています。また、本質的に分野横断的な学問である脳科学研究においては、分野を超えて移動して行く「脱藩浪人」的若手研究者の存在を許すような制度が望ましいと思われます。浪人と言っても、本当に生活に困ってしまうことの無いように、ある程度の無駄は覚悟しつつ、そういう研究者をサポートする体制をつくる必要があると思われます。
- ・ 包括脳ネットワークとしての、重点的研究課題を設定しても良いと思います。課題はトップの人達だけで決めるのではなく多くの人の意見を取り入れながら、分野横断的な研究課題が良いと思います。
- ・ 意見はありますが、包括脳ワークショップのアンケートで答えさせるべきではないと思います。次の競争的資金についてでもそうです。これらは、別の機会にアンケートをとったほうが良かったのではないのでしょうか？
- ・ 財源に限られており、よい雑誌に投稿・採用されるには複数の研究手法を使ってのアプローチが一般的になっている中で、単独の研究室ですべての研究を行うことは、かえって研究の速度を遅くし、個々のデータの質を落とすことになりかねない。競争力をつけるためにも共同研究は有効な手段である。
- ・ 質問22に記載した通りです。
- ・ 若手が短期的なプロジェクトに縛られることなく、安心して研究に没頭できるような環境を整えること。
- ・ 脳科学は医学、工学といった多種多様な分野の融合領域なので、学部時代から、この分野を専攻する予定である学生に対する教育を充実させる必要がある。
- ・ 研究の本質を押さえた教育。
- ・ 脳科学などの様々な分野からなる研究においては、このようなワークショップの量を増加し他分野間の交流をより深めることが重要であると考えます。
- ・ 進んで専門外の見解を聞き入れる耳を持つことが重要であると考えられる。また、資金がなくては研究も難しいため、日本政府の研究に対する理解を得ることも優先すべき事柄であると考えます。これなくしては優秀な日本の研究者は海外に渡るしか道は残されておらず、日本の脳研究の発展は難しいと思われる。
- ・ 同分野および異分野の研究者間交流をもっと積極的に。現在は積極的でなかったり形だけのものが多い。将来のためには大学院生をしっかりと教育して質を向上させるべきで、そうすれば次のポスト、若手研究員も自ずと質が向上する。ただし、やたらと数を増やすべきではないと考える。就職できるポストも決して多くない。現在、数だけ増やしても不幸な人が増えるだけである。後先を顧みずポストを増やすような政策をとったつけがきている。

質問 29: 科学研究のための競争的資金の在り方についてお答え下さい(複数回答可)。



質問 30: 科学研究のための現在の競争的資金の在り方について、自由にご意見をお書きください。

- ・ 基盤研究費を現状の倍にすると、研究者の自由な発想に基づく研究がより実質的になると思われる。また、トップダウン的大型研究費と自由発想研究費の間に、従来の特定領域研究のような研究コミュニティに割り当てる研究費が重要で、復活すべきと思う。
- ・ 複数年度予算制度の導入。
- ・ 額は実績にあわせて変動するが安定的に供給され(=ゼロにはめったなことではならない)、かつ用途をあまり限定されず合算も可能で自由に使うことのできる額の大きな競争的資金ができると良いと思います(実績が考慮せず額も小さい国立大学の校費のようなものはよくありません)。
- ・ 既に一流となっている研究者に集中するだけでなく、これから伸び行く研究者にも研究費が配分されるよう、裾野を広げて欲しい。
- ・ 現在の科研費のような年度、予算額のタイプ以外に、アメリカのNIHR O1 グラントのように、4~5年単位、ポストドク雇用可能、進捗によっては継続審査を受けられるようなタイプの長期研究支援をいただけるようなタイプの研究費があるとよいかと思います。あと、最先端・次世代研究開発支援プログラムのような超高額(年間数千万円 x 4年) 支援を150人程度の限られた若手研究者に配布するならば、その研究費の額を4分の1位にしても支援を受けられる研究者を増やすべきである。年間1000万円程度の額を数年継続して支援してもらえるような研究助成が「さきがけ」以外にもっとつくっていただきたい。
- ・ 貧富の差が大きくなっているように感じられる。

- ・競争的資金の割合を減らして、人に対する資金を増やすべきだと思います。競争的資金という部分でのポストクへの給料支払いや、雇用を流動化するだけでなく、不当に賃金を低く抑えられてしまう構造的欠陥があります。研究はモノがするのではなく、ヒトがするものなので魅力ある職種になるようなベースアップが必要でしょう。「優秀な人はビジネスをする」というのが常識ではまずいと思います。
- ・競争的資金は効率よく資金を分配する仕組みのように見えるが、本当にそうになっているか、文科省でも科学者でもない、第三者に検証してもらうべきだ。例えば、運営費交付金がどんどん減らされている大学と、理研のような別資金の機関の者が同じ競争的資金に応募するのは奇妙に感じる。また、若手と退職間際の研究者への資金の配分のバランスは適当か、各大学などで共通機器の整備は適度になされているか（特に若手は重要）、など検討すべき点が多い気がする。
- ・明確な選考基準、採択理由の詳細な公示、不採択理由の詳細な通知
- ・質問8の回答にも書きましたが、自由な独自研究の種目をより重視して、腰を据えた研究を可能にしてほしい。採択数を増やす、予算額の幅を高額まで数段階に広げる、年限をすべて5年に延ばす（選択で3年ぐらいがあってもいい）。また、トップダウン型や特定領域研究などの枠にはまった研究スタイルや組織による種目の予算を少し減らしてでも、もっと必要に応じて時々の問題にオールジャパンで挑むようなコンソーシアム研究、大規模や小規模のグループ研究など、研究者やグループの獨創性、独自性を生かす申請も可能な種目があったら良いと思う。
- ・国民の理解を深めて科学研究が必要と考えていただくことにより、パイを増やすことが根本的に必要であると思います。
- ・生物実験系研究の多くの場合、若手Bや基盤Cに採択されたとしても、金額の充足率によっては、そのみで研究を完全に遂行することはかなり難しく、他の研究資金の獲得を頼むざるを得ない。過分な研究費は不要であるが、十分な額の資金をある程度の期間継続して獲得できる仕組みが望まれる。
- ・研究の質を向上するために、審査結果に関する審査員の具体的なコメントが必要。また、そのコメントに応じた修正が次の審査に生かされる制度が望ましい。その実現のためには、科研費の審査員を増やし、1人の負担を減らすこと、また、そのために、文科省が審査の専門領域を十分把握できる組織を構成することが必要と考える。
- ・予算の執行をデフォルト無期限とし、残額に応じて新規申請の制限をかなり減らせば、全体額が減り、資金の有効活用ができると思います。必ず予定通り進むようなものは研究とは言えないと思います。いい人材が常に採用できるとは限りません。人件費を確保したからといって、優秀でないポストクを雇うのは、誰にとっても不幸です。研究計画に資金を配分するという考え方をやめ、いい業績を上げてきていい研究計画を立てた研究者に配分する、という実質の審査通りの名分で資金配分をするべきだと思います。
- ・年度内に使い切らないといけない規制のはそろそろやめたほうが良いと思う。まさに無駄遣いにつながる。
- ・現在は大型な支援に傾きがちであるので、多様な研究支援方法があることが望ましい。神経科学コミュニティから、かなり強く要望しないと、政府やfunding agencyの幹部は、自分たちのcost performanceから、大型のものに流れると思われる。
- ・もう少し安定的に研究ができるような制度がほしいです。現在の制度では、多くが2-3年で終了してしまいます。そうすると、また多くの申請書や報告書を書かざるを得ません。ほんとは昔の国立大学の運営交付金のようなものがあり、ある程度安定して研究できれば良いかと思います。長い目で見れば、研究の多様性にもつながります。正直なところ、現在、科研費やJST研究費などの獲得競争の面だけが強くなってきているような気がします。このままびつな構造は助長されれば、日本の教育や研究がどうなるのか、かなり不安です。
- ・年によって多少の増減は仕方ないのですが、科研費を少ししか獲得できなかった年のためのセーフティネットがあると良いと思っております。
- ・フェアな審査を行って欲しい。現状では審査の過程が不透明であり、不採択時の評価やコメントを読んでどのような点を改善すべきかまったくわからない。
- ・各projectの仲間意識が高く閉鎖的。
- ・競争的資金は、日本社会の発展に必要な不可欠な課題をトップダウン的に行う研究に重点的に配分する。すなわち、そういった研究成果が見込めるとされた研究者は、重大な責任を負う。研究者の自由な発想に基づく本来の研究は、給与もしくは報奨金等の範囲内で行う。
- ・システム研究では時間がかかるので、より長いスパンの競争的資金があるとよい。若手スタートアップに採択されたことがあるが、2年間というのは短かったと感じた。
- ・豚まんのTVのCMではないが、お金のあるときとないときの差が激しく、このことがあまりにも、研究を阻害している。したがってまた、とにかく、出せる申請は全部出して、複数採択されたラボは、もうこんなにももらっても仕方ないのに、というほどあって、使うことに困るほどでしょう。これを防ぐために、他への申請状況の欄が調書にあるとの反論もあると思いますが、そのうえでの話であって、競争的資金制度そのものの問題であり、申請書の様式を変更するぐらいで、どうなるものでもないと思います（これ以上、複雑にしない方がいいと思います）。潤沢に資金を得ている研究者は、当然、今のままで概ねよいとコメントされるでしょうし、私もそういうときもありました。NIHのファンドがそうだから、日本もそれにのらって、ファンドもピッキーでいいんだとの考えであれば、現状からはあきらかに、間違いだと思います。事件は現場で起きているんだという映画のせりふにならないかと、研究は小さなラボでも行われているんだということを考えた配分と施策が実現することを希望します。このアンケートにこのようなことを記入しようと思って、ログインした訳ではありませんでしたが、自由に意見をとのことでしたので、コメントさせていただきました。
- ・退官までの年数に応じて研究規模がdownsizingされるように資金の供給量を制限し、余剰分を次世代に回す。国際競争力のある偉い先生には海外に進出するためのスタートアップ資金を提供する。

- ・ 基礎的なところには、広く薄くで良いと思います。支援のようなサポート体制を充実することで、良い研究はのぼせると思います。そのためには、「目利き」が必要ですが。
- ・ (1) 自分の給与に予算を充当できるグラントを増やして欲しい。(2) 「信賞必罰」＝著しく成果を挙げたプロジェクト主宰者には何らかの褒賞を与え、著しく成果が挙げなかったプロジェクト主宰者には何らかのペナルティを課すべき。
- ・ 性急に成果を求められすぎず。
- ・ 未発表データとレビューシステムの充実をしてほしい。一方で、スタートアップ資金の額と採択率を挙げてほしい。
- ・ 文科省の方が最後に話しておられたように、年長者への資金偏重が目立つ。これから伸びる若手の育成のため、年長者への資金（特に高額の資金）には上限を設け、若手の採択率を増やすべき。高額の資金を削った分で高額の資金を必要としない若手が一体何人救えることか。
- ・ ピアレビューの悪い面があるように思う。少額の予算では、かなり限定した分野の審査員が判定することになり、研究内容が一部競合してしまう。
- ・ 研究費制度自体の問題点もあるが、研究者側にも多くの研究費を取ることをよしとする傾向が見られるのではないかと。多くの研究費を集めて、ラボを大きくすることが研究者の成功であると、我々自身が誤解している節がある。もっと、研究者同士でシェアするという謙虚な姿勢がないといけないのではないかと。ただし、現在の間接経費の制度が、研究者に多額の研究費を取るように拍車をかけている（特に研究機関側から）ので、まずはこの制度の改善が必要とされる。
- ・ いろいろありますが、今日は忙しいので別途提案させていただきたく思います(今日が締切りということなので書いておきます)。
- ・ 研究費の単年度制度は無駄が多いので、繰越金を公開するなどして、残額の透明性を確保した上で、複数年にわたって使えるようにしてほしい。
- ・ 事業仕分けにおいて、科学研究への理解が一般国民を代表する国会議員においてさえ、明らかに欠如していることが判明したと思います。今後国民の理解を深めて科学研究が必要であると理解していただき、「パイの分配」から「パイを増やす戦略」が必要ではないかと考えます。
- ・ 各研究者がどのような研究費でどのように運営しているのか、を無記名でアンケートをとり、長所ある資金獲得例には見習えるようにできればと思う。特に柳田敏雄先生のご講演は、もちろんご実績に基づいてはいるが、エネルギー削減という大きな目標に対してできることの提案が漸進センター設立に結びついた顕著な例に思えた。
- ・ 特定領域から新学術領域へ小規模になった分、領域形成に向けて新たに組織を作ろうとするエネルギーが以前にも増して必要とされるようになってきた。このエネルギーが無駄に終わらない様、実質的な共同研究を促進する方向に注力する必要があると思う。一方、脳研究に関して言えば、元来学際的で大きな分野であるので、新学術領域の規模では、実質的にはかえって細分化の方向へ行っているように思えてならない。学問分野によって領域の規模に違いをつけてもいいように思われる。また、近年、競争的資金の比率が大きくなり過ぎているように思われる。学問の継続性という観点から考えれば、一定程度の研究費は保証すべきだと思う。
- ・ 一般向けの科学コミュニケーションを増やすことで、脳科学に対する理解や協力を得て、それに伴う寄付や本などの売り上げ金を研究資金に使えると良いと思います。
- ・ まだ教員として採用されたばかりで競争的資金に応募したことがなく、明確な意見は持っていないが、若手のオリジナリティのあるアイデアを支援するような研究資金の枠は確保してもらいたいと思う。
- ・ 研質問 29 では、一見矛盾した回答をしているが、真意は下記の通り。研究はステップワイズで連続多液なものであるため、萌芽的な研究はフィジビリティテストとすることで額は小さくても採択率は 30~50% (いわゆる減額計画おはねるという意味)。幅広採択が好ましい。フィジビリティテストで将来性があるとの結果が出たら、フォローアップ研究のような形でやはり採択率は 20% くらいで金額を上げる (フィジビリティテストで成果が上がったものにおま自動的に予算を付ける)。大型予算は採択率は低くても集中投下。理想的には完全に中立的で、専任できる高度な知識をもつ審査官が調査ベースで、長期的に見て最も重要な研究テーマから決定できるようなシステムが必要。
- ・ 資金を配分されたにも関わらず、研究計画に沿った成果を挙げられなかった場合には、有る程度のペナルティが与えられるべきである。
- ・ 現在、大型資金が減ってしまったのでこれを増やしていこうという気運があるように思われるが、しかし、実際に研究を進める上でより重要なのは、中型（基盤 B 程度）の研究費をより充実させることであろう。中型研究資金の採択率が悪すぎる、50%程度まで上がらないものか（せめて 30%）。非常に大きな額の研究費というのは、特別なケースを除けば多くの人にとってはあまり必要ではないと思う。その分を中型の研究資金に回した方が良い。一方、多くの研究者が参加する集合体としての比較的大きな研究費は、研究者間の共同研究や相乗効果という観点からも意義があると思うが、運用に関する透明性を高めることやきちんとした評価を行うことが必要であろう。なお、基盤研究などで、申請予算額をお決まりのように 2-3割削減するのはやめてもらいたいものである。まったくお役所的手法であり、場合によってはその結果、申請した研究内容が遂行不可能になるはずだが、全然研究費をもらえなくなるとはより困るということで皆そのまま受け入れているわけで、足下を見て悪しき慣例を強行し続けているということになり、はなはだ遺憾である。